

## 大手高校誕生物語

本校は、明治36(1903)年の5月1日に「長岡高等女学校」として創立され、今年度117年目を迎えました。つまり、最初は「女学校」、「女子校」としてスタートしたのです。しかし、大手高校が創立される3年前の明治33(1900)当時、新潟県下には二つの高等女学校がすでに存在していました。一校は現在の新潟中央高校の前身である新潟県高等女学校であり、もう一校は現在の高田北城高校の前身である高田高等女学校でした。ちなみに、両校が設立された明治33(1900)年には、東京に今の津田塾大学の前身である女子英学塾が津田梅子女史によって創立されました。津田梅子は、先般、5年後の2024年度に一新される新しい5,000円札の肖像に決まつたことでも話題になりました。

戦前、高等女学校、略して高女に対して、地域の優秀な男子に普通教育を行う旧制中学という学校がありました。長岡で言えば、旧制長岡中学、今の長岡高校です。旧制と言うのは、日本が太平洋戦争で敗れた昭和20(1945)年以降に制定された新しい教育制度に対する呼び方です。旧制中学の修業年限は5年で、昭和15年当時の進学率は約7%でしたから、大手高校が創立された明治36年当時の進学率は更に低かったはずです。旧制中学に進学する生徒が、いかに優秀なエリートであったかを想像することができると思います。

今、女子の皆さんに、「君は女だから大学には行かなくても良い」などと発言したら、当人を傷つけるばかりか、大きな批判を受けることになると思います。しかし、現在と大手高校が創立された120年前の明治時代とでは、女子教育に対する考え方や価値観は全く違うものであり、「女子には教育はいらない」と考えている人はとても多かったです。でも、優秀な男子を教育する旧制中学があるのに、男子に負けないくらい優秀な女子を教育する学校がないというのは、やはりおかしいですよね。だから、当然の成り行きとして、優秀で勉強したいと思う女子は、自分も旧制中学の男子と同じように、高いレベルの教育を受けたいと思うようになるのは至極当然のことです。こうして、中越地域の女子の中に女子教育の必要性が高まる中、新潟と高田に高等女学校が創られたのですから、「なんで長岡には高女がないのか、長岡にも高女が必要ではないか」というように、長岡地域における女子教育振興の期待が高まっていったのです。

こうした社会状況の中で、長岡高等女学校の設立に尽力する人物が登場します。

その人物とは阿部致という当時の古志郡長でした。阿部郡長は、明治33年2月から何回も何回も古志郡会に高等女学校の設立を提案しましたが、「女子に教育は必要なし、時期尚早」等を理由に、いずれも否決されていました。しかし、何度否決されても、阿部郡長さんの高女設立の熱意は衰えることはありませんでした。こうした中、明治34年7月に、女子教育に否定的だった長岡地域の空気を一変させる出来事が起こりました。それは、早稲田大学の創始者である大隈重信が、国家の経済政策に関する講演を行うために長岡にやってきました。その際、阿部郡長さんは大隈に面会し、長岡における女子教育の必要性を熱く説きました。そしてその熱意に感動した大隈が、講演会の中で、長岡に高等女学校を設立するとの急務なるを説き、聴衆に深い感銘を与えたのでした。その結果、女子教育の必要性の機運が急激に高まり、講演会の約半年後の明治35年2月の郡議会において、ついに長岡高女の設立案が満場一致で可決されたのです。阿部郡長さんが高女設立を郡会に提案してから丸三年が経っていました。

私が、生徒の皆さんに伝えたいことは、大手高校は、長岡地域の男子に負けないくらい優秀な女子を教育するために117年前に設立された長岡高等女学校の伝統を受け継いでいる素晴らしい学校だということです。勉学は勿論のこと、スポーツや様々な活動にしっかりと取り組んだ、リーダーシップと気骨のある高女時代から連綿として受け継がれている校訓が「済美」です。

「済美（美を済す）」という言葉は、中国の古典『春秋左氏伝』にある語で、「人としての美しい在り方や生き方を探求する心の大切さ」を表すものです。生徒の皆さんには、創立以来の校訓である「済美」の心を大切にしながら、大手高生としての自信と誇り、気概を持って、勉強に、部活動、ボランティア活動等に一層頑張って欲しいと思います。

— 令和元年度1学期終業式 校長講話（令和元年7月26日） —